OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴィシー政権下のフランス人民党 1942-1944年（1）
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2014, 64(3), p. 47-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴィシー政権下のフランス人民党　1942 － 1944 年（1）

竹　岡　敬　温†

1. 政権をめざして

ドリオがフランス義勇軍団（LVF）とともに東部戦線に出掛け，パリを留守にしているあいだ，フランス人民党は休眠状態にあったのではなかった。おそらく，同党が，かつて，この時期ほど，パリ地域で，多量のびらをまいたことはなかったであろう。毎週，あらたなびらが5万部から10万部，さらには20万部印刷された。開戦後軍隊を離脱してモスクワに逃亡した共産党書記長トレーズとドリオを比べた「脱走兵トレーズ！戦士ドリオ」というびらが1941年9月初めに5万部印刷され，12月半ばには10万部再発行された。「共産主義と戦闘準備状態にはいれ」（9月中頃，10万部），「ジャック・ドリオの戦い」（10月末，5万部），「正義をおこなおう」（11月末，20万部）ほか，大量のびらがドリオのフランス義勇軍団（LVF）への華々しい参加を喧伝した。また，「フランス人民党は勝利する」，「フランス人民党は共産主義を撲滅する」，「ドリオとともに，われわれは勝利を収める」，「フランス人民党はフランスの力を取り戻させる」，「ドリオは正しかった」などというちらしがほとんどどれも20万部印刷された。さらに，ドリオが東部戦線に出発した数日後には，「党首は出発した！」と題したような，しばしばカラー印刷されたポスターが街中いたるところに貼られた。そして，それらのポスターは，他の対独協力派グループの指導者たちにとっては，きわめて厳しい，つぎのような文章で終わっていた。「部下たちにかれらの生命をかれらの理想のために危険にさらすことを求めた指導者は，みずからの生命を危険にさらすことができなければならない[1)]」

ドリオが東部戦線へ出発する以前の1941年8月には，フランス人民党は地区集会や公開集会を繰り返し開催していたが，その頃，共産党員からこれらの集会を攻撃するというおどしがあったため，ドリオは，集会をかれの出発まで延期させた。しかし，最初の政治的性格の暗殺の対象となったのは，フランス人民党員ではなく，人民戦線内閣時代の内相マルクス・ドルモワであった。その事件は，ドルモワが住居を指定されていたモンテリマール（ドローム県）で，7月26日に起こったのだが，共産党員の仕業ではなかった。マルクス・ドルモワといえば，1937年にドリオをサン・ドニ市長の職から罷免した人物であり，真偽のほどはあやしいが，1940年7月のヴィシーでの国民議会のとき，ドリオが「ドルモワよ，われわれはお前の息の根を止めるつもりだ」と罵倒したと噂されていた人物であった。フランス人民党は，この暗殺に関係してはいなかったのだろうか。ヴィクトル・バルテレミーは，1941年9月後半に，ヴィシー政府の内相ピエール・ピュシューと長い会話を交したとき，この事件について問われ，ピュシューが「この暗殺の命令を下したのは，ジャック自身であるのをわたしは知ってい

† 大阪大学名誉教授

1) これらのポスターやびらは，現物でか，あるいはタイプライターで打って転写するかして，ヴィシー政府の総合情報室（RG）によって保存された。*Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340.

る。それは，6月末，リヨンでの内輪の集会のときだ」といったのにたいして，これを否定している[2)]。事実は，この暗殺は元カグール団の犯行であったことがのちに判明したが，当時は，フランス人民党の数人の幹部も，それを同党の行為であると認め，事実上の犯行声明をさえ出したほどであった[3)]。

共産党員による最初の暗殺の対象となったのは，フランス人民党の党首の側近や幹部ではなく，元共産党書記で同党を脱党したマルセル・ジットンで，かれは1941年9月4日に自宅近くで自転車に体当たりされて転倒し，翌日，死亡した。ジットンは，幾人もの著名な共産党離党者とともにフランス人民党の結成に参加したが，1941年7月には同党を離党し，対独協力に深入りすることなく，共産党と絆を断ったできるだけ多数の元共産党員を再結集しようと願って，フランス労農党（Parti ouvrier paysan français）を創立した人物であった。共産党はジットン暗殺が同党の犯行であると認めようとはしなかったが，同党指導部が内密にその指令を出していたのは，ほぼ確実であった。暗殺される数日まえ，ジットンは，数人の共産党からの転向者とともに，共産党支持の労働者にたいして公開書簡を差し出し，パリの諸新聞が大々的にそれを発表したところであった。ドリオがフランス義勇軍団（LVF）とともに出発したその日に起きたこのジットン暗殺事件の結果，フランス人民党は，同党の集会にも危険が迫っていることを認めざるをえず，警備組織を強化した。

1941年6月20－22日にリヨン・ヴィルールバンヌで開催された自由地区のフランス人民党大会のときに，ドリオは指導部をパリと統合することによって党を再編成しようと決意し，以後，ヴィクトル・バルテレミーが，ジャン・フォサーティの助けを借りながら，自由，占領両地区の書記長を引き受けることになった。バルテレミーは，パリ地域の幹部にたいして，柔軟かつ確固たる態度をとって指導力を発揮し，そして，占領地区の組織責任者アラン・ジャンヴィエは，もちろん多少の誇張があろうが，フランス人民党の頭文字PPFを「Premier Parti de France　フランス第1の党」と読んで言葉遊びされるほどに，フランス人民党を以前のように定着させることに成功した。また，6月29日のパリ地域の幹部たちの集会のときには，マルセル・マルシャルが共産党員の活動を十分取り締まれない警察の非力をフランス人民党が補わなければならないといい，多量のびらやパンフレットが配布された。12月7日には，同じパリ地域の幹部たちにたいして，マルシャルは，かれがなお市長の職にとどまっていたサン・ドニでの活動の成果を誇り，「サン・ドニでは，共産党の新聞はもはや存在していません。われわれは，こうして，ドイツ人にたいして，ドリオの支持者が共産主義の真の敵であることを証明したのです」と語っている[4)]。

1941年10月31日には，アラン・ジャンヴィエが署名したつぎのような「政治的指導についての通達」が党内に配布されたが，それは，1940年12月9日に回覧されたが，そのときはほとんど実行されなかった指令を再度回覧したものであり，それはあらためて党再生の動きを示すものであった。「党のすべての事務所では，ペタン元帥と党首との肖像写真をそれにふさわしい名誉ある場所に掲げなければならない。すべての集会は“党首への敬礼”の伝統的な儀式から開始されなければならない。フランス人民党の敬礼は，党員が出会ったときにはかならず実行され遵守されなければならない。その他の挨拶の表現は，党の敬礼に“倣う”べき礼儀作

2) Victor Barthélemy, *Du communisme au fascisme. L'histoire d'un engagement politique*, Albin Michel, Paris, 1978, pp.260-261.

3) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, pièce du 22 août 1941.

4) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapports des 30 juin et 8 décembre 1941.

法の規準に一致しなければならない。ジャック・ドリオが主宰する集会では，党首の到着は，“党首”という語を発することによって警備責任者が告げるであろう。そのとき，出席者全員は立ち上がり，党首がその席につくまで，敬礼の姿勢をとりつづけなければならない[5]。」

このような党再生を示すシンボルとなったのは，ドリオが東部戦線に出発したあとの 1941 年 10 月 27 日，日曜日，フランス人民党がジャック・ドリオとフランス義勇軍団（LVF）をたたえる集会をパリのヴァーグラム会館で開催したとき，満員の聴衆を集めるのに成功したことであった。同党の幹部たちの発表によれば，広いホールと拡声器を据えつけた別館は 8,000 人の聴衆で埋まったという（警察の推定では 2,500 人）。ドリオのいない集会がこれだけの聴衆を集めたというのは，少々驚きであった。

3 色の横断幕が 2 つの会場を飾り，そこには「義勇軍団が結成されたときには，わたしは最初に出発するであろう」，「この戦争は，今日では，ボルシェヴィズムという卑しい文明にたいする戦いになった」，「わたしはボルシェヴィズムとの関係を絶ち切った。どうしてもそうしなければならなかった，たったひとりの人間である」などの「ドリオ自身の言葉」を読むことができた。フランス人民党書記長ヴィクトル・バルテレミー，同党指導部のロジェ・ヴォークランとジャン・フォサーティ，人類学学院民族学教授ジョルジュ・モンタンドン，在郷軍人作家協会副会長ジャック・ブーランジェ，元共産党中央委員で元モントルイユ市長フェルナン・スーペ，ジャーナリストのシャルル・ディウードネ，元在郷軍人共和連盟副会長エミール・ネドレク，フランス同盟指導者ピエール・コスタンティーニらがつぎつぎと演説して，ジャック・ドリオの行動を賞賛した。フェルナン・スーペはフランス人民党に入党したばかりであり，「これまで共産党のためにたたかうことによって，われわれは間違いを犯してきた。われわれはモスクワに裏切られた。そのことを正直に，だれはばかることなくいわなければならない。ジャック・ドリオは，われわれより先にそのことを理解した。かれは正しい」と語った。ドリオ夫人が集会の途中で来場し，演壇上の席に座るよう促され，熱烈な拍手で迎えられた[6]。

ドリオは，1941 年 9 月 2 日（かれがフランス義勇軍団 LVF とともに出発する前々日）に，小さな集団であるフランス同盟の指導者ピエール・コスタンティーニと共同行動をめざした声明に署名していた。ドリオはコスタンティーニがかれにもたらすわずかばかりの加勢に幻想を抱いていたわけではないが，元カグール団団員という前歴をもつコスタンティーニとの合意が，おそらく，カグール団の組織者で，当時，デアと対立して，国家人民連合を去ろうとしていたドロンクルとかれが 1940 年 9 月に設立した政治組織，革命的社会運動（MSR）を，フランス人民党に近づけることができるのではないかと期待していたのであろう[7]。

---

5) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340, pièce du 12 novembre 1941.

6) Jacques Doriot, *Réalités*, Les Editions de France, Paris, 1942, Préface《Hommage à Jacques Doriot et à la Légion》, pp. I-XI, meeting du 27 octobre 1941; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, les pièces des 25, 26 et 27 octobre 1941; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340, copies de tracts de Soupé et Nédelec, ヴァーグラム会館でおこなったフェルナン・スーペとエミール・ネドレクの演説の一部を再現したパンフレット。

7) コルシカ出身のピエール・コスタンティーニは，元カグール団団員であり，そのむら気と逆上的性格によって有名であり，他の対独協力派グループからはあまり信用されていなかった。かれはイギリスにたいしては病的なまでの憎悪を抱き，メルセル・ケビル事件のあと，イギリスと戦争を始めるために，飛行士を集めようとした。それとは反対に，1936 年に，当時，フランスとドイツとの友好関係の促進をはかって設立された仏独委員会のベルリンでの事務局長であったヴェストリックと知り合いになり，それ以来，かれのドイツびいきは亢進しつづけ，1940 年 10 月に発行されたかれの著書『ボナパルトの偉大な

1940年9月にコスタンティーニが結成し，ドイツ大使館によって認可された「粛清，社会的相互扶助，ヨーロッパ間協力のためのフランス同盟」は，読むものもほとんどなかったその週刊機関紙『呼びかけ』の発行も含めて，全面的にドイツからの資金援助に頼っていた。1941年10月には，団員数は2,500人を越えず，とくにパリ地域，ディジョン，リールに集中していた。この小集団の指導者コスタンティーニは，ヴァーグラム会館での1941年10月27日の集会のとき，「わたしは，ジャック・ドリオと固く握手した・・・フランス再建のためのたたかいにおいて，フランス同盟とフランス人民党は，同じ決意と同じ意志をもってともにたたかい，これからもともにたたかうであろう。われわれが勝利を収めるのは，確実である。われわれがもっとも公正であり，そして，われわれがどうしてもなしとげたいとおもっている仕事が，生命以上に大切なものだからである」と叫んだのであった。

フランス人民党の発展，コスタンティーニと締結した協定，また，国家人民連合で指導者たちの対立（とりわけデアとドロンクル）によって進行した分裂の危機などの結果，ドリオとフランス義勇軍団（LVF）の出発後まもなく，ドリオの同僚たちは，他の対独協力派の諸党にたいして合併のための話し合いを提案した。しかし，その交渉は決裂した。マルセル・デアは，その日記のなかで，「この卑劣漢たちは，ドリオひとりの勝利のために活動し，われわれを追い出そうという下心をもち，潜入工作のことしか考えていない。それはふざけた行為であると同時に恥ずべき行為でもある。アベッツは，ドリオとコスタンティーニの陰謀に精力的に反対している」と激しく非難している。そして，このすこしあとに，「フランス人民党との完全な決裂」と簡潔に記している[8)]。

しかし，デアは国家人民連合の他のリーダーたちと良好な関係を維持できず，ついには同連合の指揮を取ることを拒否するにいたった。こうして立場の弱くなったデアは，フランス同盟，革命的社会運動（MSR），フランス人民党とともに，フランス人民党のリーダーたちが提案し，「力を合わせ，行動を強化するために定期的に集まるという決意」を明確にした共同マニフェストに署名せざるをえなかったのである。ドリオが，かれの満足の気持を表明するために，東部戦線から打った電報にたいして，コスタンティーニ，デア，ドロンクルは友情と「もっとも熱烈な誓い」を表明した返電を送った。この結果，フランス人民党は，この電報の文章を再現し，ドリオを「戦前にも休戦以後も，国民革命の推進者」で，「国民的諸政党の連合の促進者」であると賞賛した，「この5年間のジャックのたたかい」と題するびらを10万枚撒いた。このびらは，「フランス国民よ，ジャック・ドリオがこの国の愛国者の連合を実現するのを助けたまえ」という文章で結んでいた[9)]。こうして，1941年11月30日の集会で，ヴィクトル・バルテレミーは，フランス人民党パリ地域の党員たちを前にして，単一政党は他の諸政党をうまく引き立てていくことのできる党によって組織されるであろうと宣言した[10)]。

デアとドロンクルとの対立は激化した。デア

思想』のあとがきのなかで，「いま連合の構想過程にあるヨーロッパから，かつて統一ヨーロッパの神託を告げた武人であったあの人〔ナポレオン・ボナパルトのことである〕にたいして，感謝の賛歌の声が高まり，その感謝の歌声は，明日には，アドルフ・ヒトラーへの諸民族の感謝の気持と合流するであろう！」と書くまでになった。1945年逮捕され，1952年に裁判にかけられたが，精神医学的鑑定によって責任無能力者と認められた結果，釈放され，コルシカに帰された。

8) *Journal de Marcel Déat*, 12, 15, 17, 25, 26 septembre et 1er octobre 1941.

9) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340, note et copie du tract en date du 30 octobre 1941; V. Barthélemy, *op. cit.*, p.262.

10) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 1er décembre 1941 (réunion du 30 novembre).

は，ドロンクルを蹴落とすには，どうしてもフランス人民党の助けを必要とし，そのため，かれとドリオの仲間たちとの関係は不信から親愛に変わった。1941 年 11 月 10 日，フランス義勇軍団（LVF）の役員会で，ドロンクルは総裁のポストを失い，各党が 2 か月交代で総裁職をつとめることが決定された。デアは，ドリオがフランスに帰国次第，総裁のポストをかれに委ねることに同意した。デアは，「反ドロンクル作戦」を実行するために，ドリオを当てにしていた。その作戦とは，フランス義勇軍団（LVF）の財務勘定を査定すれば，「あらゆるレヴェルで無数の汚職を伴ったひどい乱脈経理」があきらかになるはずであり，その帳簿の提出を要求することによって，ドロンクルを「追いつめる」ことであった[11]。

したがって，ジャック・ドリオがみずからの生命をかけて戦った広大な東部戦線からパリの対独協力主義者たちの小さな世界に帰ってきたとき，パリはかれにとって最良の政治状況にあった。1942 年 1 月 2 日，かれは，フォサーティを伴って，デアを長時間訪問し，2 人の人物は意見の全般的な一致を確認しあった。ドリオはラボンヌ大佐の手紙をペタンに手渡すためにヴィシーに出発しなければならず，1 月 17 日にパリを立ち，19 日にペタンとダルランに迎えられた[12]。パリに戻ったドリオは，デアに会い，このときのペタンとの会見を思い起こして，「老人は，ボルシェヴィズムを粉砕することが必要であると話したあとは，ひたすら，その“崩壊”についてしか話さなかった」とのべている[13]。

このデアにたいするドリオの打ち明け話は，1 月 23 日，レストラン，トゥール・ダルジャンでの「パリ報道界」主宰の昼食会のときにされたものであるが，デザートのとき，このドイツ占領軍の言いなりになっていた組織の会長で新聞『現代』の編集主幹ジャン・リュシェールの短いスピーチのあと，ドリオが挨拶し，フランス義勇軍団（LVF）の冒険について語り，義勇軍団の最初の負傷者であるデアをたたえ，ロシアにおける戦争の今後についてかれの楽天的な見通しを語った。この 1942 年 1 月末の日々，ドリオは，フランス義勇軍団（LVF）役員会公認の総裁として，「ドロンクル問題」と義勇軍団の財務問題の解決に全力を注ぎ，最後には，どうにかドロンクルの恨みを買うこともなく，会計簿と財務関係の資料をかれに提出させることに成功した[14]。

ドリオは，1942 年 2 月 1 日，日曜日のパリの冬季競輪場での大会のとき，最高の栄誉を受けた。フランス人民党は，80 万枚のびらを配り，7,500 枚の巨大なポスターを貼付し，公道の 250 箇所に掲示板を設置するなど，途方もない宣伝努力によって，この大会を準備した。同党の幹部たちは 1 万人の聴衆を集めたいと希望していたが，警察報告によれば，1 万 3,000 人の人びとが集まった[15]。フランス人民党は，それを 3 万人と発表した。冬季競輪場は「超満員」になり，「予想外の成功」であったとデアは日記に書きとめている[16]。大会はフランス義勇軍団（LVF）中央委員会によって企画されたので，この日の朝，同中央委員会の総裁になっ

[11] Jacques Delarue, *Trafics et crimes sous l'Occupation*, Arthème Fayard, Paris, 1968, pp.189-190, 195-198; *Journal de Marcel Déat*, 10, 20, 26 septembre et 31 décembre 1941.

[12] ディーター・ヴォルフによれば，このとき，ヴィシーでは，ドリオは，ペタンとダルランに冷淡に迎えられ，苦い幻滅を味わったという。Dieter Wolf, *Doriot. Du communisme à la collaboration*, Arthème Fayard, Paris, 1969, p.354, 平瀬徹也・吉田八重子訳『フランスファシズムの生成　人民戦線とドリオ運動』風媒社，1972 年，pp.353-354.

[13] *Journal de Marcel Déat*, 23 janvier 1942; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 18 janvier 1942.

[14] *Journal de Marcel Déat*, 23, 27 et 28 janvier 1942.

[15] ディーター・ヴォルフによれば，約 1 万 5,000 人。D. Wolf, *op. cit.*, p.358, 平瀬・吉田訳, p.354.

[16] *Journal de Marcel Déat*, 1er et 2 février 1942.

たばかりのマルセル・デアが議長をつとめた。デアは，その短い開会のスピーチのなかで，ドリオの名をあげて拍手喝采を送らせ，「思想と行動を一致させた政治家で戦士」であるドリオに敬意を表し，ついで，もし出発のまえに暗殺者がデアを傷つけなければ，かれ自身もフランス義勇軍団（LVF）の戦士の一員として出発していたであろうと主張して，拍手喝采を浴びた。つぎに，アベル・ボナール（1932年にアカデミー・フランセーズ会員に選ばれ，1938年にフランス人民党に入党）が30分に及ぶスピーチをおこない，最後に，熱狂的な拍手で迎えられてドリオが演壇にあがった。このときのドリオの演説について，『イリュストラシヨン』紙は，「超人的な風が群衆の頭上で吹き荒れた」と書いている[17]。

ドリオは熱弁をふるった。「ヨーロッパは，いま大きな危機にあります」とかれはいい，共産主義の脅威，非共産主義者間の内戦と殺し合いについて論じ，国民の伝統，家族，信仰のすべてが破壊されようとしている危険に警告を発して，「ヨーロッパを押しつぶそうとしているスターリンの途方もない行動」と，ドイツ国防軍の占領によって証明された，スターリンの建設した巨大な武器庫について語ったドリオは，このようにして脅威にさらされているのがドイツだけではなく，「ヨーロッパ全体」であり，そうである以上，いちはやく対露戦に踏み切ったヒトラーの「たぐいまれな明敏さ」と「天才的な決意の速さ」をたたえなければならない，とのべた。ついで，ドリオは，つぎのように話を続けている。「ペタン元帥は，先日，わたしに，ヒトラー総統が，昨年6月22日にソヴィエトを攻撃することによって，ヨーロッパ，フランス，全世界のために力を尽くしてくれたといわれました。元帥は，ボルシェヴィズムを打倒しなければならないともいわれました。わたしは，元帥に，あの方が守っておられる大義を信じる一兵卒として，われわれが今日勝利するために必要な軍隊をもっている以上，ボルシェヴィズムを打ち破ることができましょうと返答しました。」きっと，ドリオは，冬季競輪場の側面を飾る大横断幕にも使えるような，「義勇軍団の兵士たちが，ドイツが先頭に立つ十字軍に参加することによって，守ろうとしているのは，諸君の祖国である。（署名）フィリップ・ペタン」という言葉を貰えるようペタンに懇願していたのであろう。事実，フランス人民党は，この日，「元帥は語った」と題して，このような文章を印刷した20万枚のびらを撒いたのであった。さらに，ドリオは，既述したような，フランス義勇軍団（LVF）の戦闘の話をくわしく語り，義勇軍団への参加を呼びかけ，「それはフランスに名誉と自由を取り戻す唯一で最後の手段である」とのべて，演説を締めくくった[18]。もちろん，たとえソ連を打ち倒したとしても，ドイツ軍の占領が続くかぎり，フランスの名誉も自由もないことはいうまでもなかった。「名誉」や「自由」というような，もっとも原理的な価値観を示す言葉も，イデオロギー的錯乱のなかでは，その意味を変えてしまっていた。

フランス人民党は，この冬季競輪場での集会直後の1942年2月5日には，「フランス労働戦線」という組織を発足させ，賃金労働者，フランス国鉄労働者，商業の事務労働者にアピールを繰り返し，2月16日，マジック・シティのホールで，パリ地域の企業支部の党員とシンパ

[17] Jean-Paul Brunet, *Jacques Doriot., Du communisme au fascisme*, Editions Balland, Paris, 1986, p. 382.

[18] Jacques Doriot, *Ce que j'ai vu en Russie soviétique*, brochure, 1942, pp. 6-9, 12, 30, J. Doriot, *Réalités, op. cit.*, pp. 120-142 に再録。*Le Cri du Peuple*, 2 février 1942; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport des 15 et 18 janvier 1942 et B/a 340, pièce du 24 janvier 1942; *Archives Nationales*, W Ⅲ 110, rapport sur le PPF de la Police judiciaire (13 avril 1945), p. 9; Cour de Justice de la Seine, dossier Fossati, rapport sur le PPF des Renseignements Généraux.

の大集会を開催した。この集会のあと，フランスの労働者に向けて，1941 年 10 月 4 日に政府によって公布された「労働憲章」とヴィシー政権の保守主義を批判し，労働規則の「根本的な革命」を要求したマニフェストが発表された。2 月末には，同党は，パリにおけるヴィシー政府の公式代表であるフェルナン・ド・ブリノン，情報相のポール・マリヨン，ドイツ軍政当局の代表らによって 3 月 1 日から始められた「国際展覧会・ヨーロッパに敵対するボルシェヴィズム」という展覧会の準備に積極的に協力した[19]。

1942 年 2 月 22 日，ドリオは東部戦線（実際には，ポーランドの野営基地）に向かって再び出発したが，そこに長くはとどまらなかった。ドイツ国防軍が，フランス義勇軍団（LVF）の政治色をなくそうとして，それを再編成している最中だったからである。3 月には，ドイツ国防軍司令部は，フランス義勇軍団（LVF）兵士は以後，政治活動をおこなわないと約束した宣誓に署名するのを拒否した，4 人の士官と 111 人の兵卒をフランスに送り返した。アベッツに宛てた 3 月 19 日の書簡のなかで，同司令部は，フランス義勇軍団（LVF）が軍事的手段として役立つには，あらかじめ完全に非政治化されていなければならないと説明し，ロシア戦線にドリオが戻ることを拒否した[20]。

ドリオが，占領地区で情宣活動のための巡回旅行をおこなわなければならないとの口実を設けて，3 月 21 日，パリに戻ってきたのは，このような理由からであった[21]。かれは反ボルシェヴィズム展覧会を視察し，3 月 29 日，マジック・シティでのフランス人民党のイスラム教徒党員とシンパの集会を主宰し，4 月 4 日からは，トロワを皮切りに宣伝キャンペーンを開始した。4 月 4 日から 5 月 15 日まで，ドリオは占領地区全域の 18 の都市を訪問して演説をおこなった。『人民の叫び』紙を信じるならば，ドリオの遊説旅行は大成功を収め，聴衆の数は合計 5 万 6,500 人にのぼった。警察報告がないので比較できないが，実際の数は，おそらく公表された数字の半分とみるのが穏当ではなかろうか。

しかし，これらのフランス人民党の集会は，かならずしも絶対安全とはいえなかった。同党は，ドイツ占領軍から，ドリオの移動のさい，警備はフランス人民党の党員だけでおこなうので，ドイツ軍兵士もドイツ警察も介入しないという約束をとりつけていた。しかし，4 月 17 日には，アンジェで周辺各地から集まった対抗デモ隊が，「ドリオに死を！ドリオを死刑にしろ！」と叫びながら，集会場近くに押し寄せてきた。この 2 日後，レンヌの劇場では，舞台に向かって投げられた手榴弾が観客席の方に跳ね返り，オーケストラボックスのなかで爆発し，ひとりの女性がけがを負った。一方，幹部の会合でのマルセル・マルシャルの主張を信じるならば，リールとナンシーでは，集会前日，びらを撒いていた警備係が群衆から罵声を浴びたけれども，しかし，集会当日のドリオの登場は，「集会が開かれた広場に殺到して，立錐の余地なくぎっしりと詰まった群衆が涙を流しながら歌う“マルセイエーズ”」によって迎えられたという[22]。

---

19) Ⅴ. Barthélemy, *op. cit*., p. 280.

20) Henri Amouroux, *La grande histoire des Français sous l'occupation*, Robert Laffont, Paris, 1976-1993, Ⅰ *Le peuple du désastre. Quarante millions de pétainistes 1939-1941*, pp. 265, 314.

21) デアが，その日記のなかで，この事実をほのめかしている。*Journal de Marcel Déat*, 24 mars 1942.

22) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 1er mai 1942. このときのドリオの巡回旅行全体については，*Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340; Saint-Paulien, *Histoire de la collaboration*, L'esprit nouveau, Paris, 1964, pp. 302-303; Ⅴ. Barthélemy, *op. cit*., pp. 297-298, 301-302; H. Amouroux, *op. cit*., Ⅰ, pp. 405-408. 休戦協定の結果，リールを県庁所在地とするノール県とその隣県のパ・ド・カレー県は，ベルギーのドイツ軍政司令部の管轄下に置かれ，立ち入り禁止地区となって，フ

この遊説旅行で，ドリオはなにを語ったのか。それは対独協力，その枠内でのナショナリズム，反英，反ソ，反共の主張であり，さらに，政権への接近の野心をほのめかした。「イギリスがわれわれから盗み取ったものを取り返すために，他のヨーロッパ諸国とともに，イギリスと戦わなければならない」（ブールジュ，5月6日），「フランスはヨーロッパ諸国と協力するか，さもなければ消滅するかどっちかだ」（ディジョン，5月8日），「あなた方はフランス人であろうと望んでいる。それならば，イギリス人にもアメリカ人にもロシア人にもなってはいけない（ドリオは「ドイツ人になってはいけない」とはいっていない）。フランス人として考えなさい。それが生き残る最善の手段である」（バイヨンヌ，4月28日），「われわれは，ヨーロッパの境界をウラル山脈にまで広げることによって，巨大な生存圏をえようとしつつある」（サン・ドニ，5月15日），「共産党の2枚舌は，果てしなく続いている。モーリス・トレーズは，“ラ・マルセイエーズ”を歌いながら，フランスの軍隊に合流したが，その2週間後に，“インターナショナル”を口笛で吹きながらモスクワに逃亡した」（オルレアン，5月3日），「わたしは，戦争責任者たちが銃殺されるという断固とした前提条件のないかぎり，政権を受諾しない。かれら戦争責任者のなかにはレノー，マンデル[23]，ブルムがはいっている」（ナンシー，4月7日），「わたしが，いつか政権の執行に参加したならば，ブルムやマンデルのようなくだらないやつらは48時間以上生かしてはおかないと約束する。あなた方もよく知っているように，わたしはかならず約束を守る」（サン・ドニ，5月15日[24]）。ドリオは，さらに自由地区の15ばかりの都市の遊説旅行を続けようとした。しかし，ヴィシー政府はその許可をあたえなかった，

1942年4月18日，ダルラン失脚のあとを受けて，ラヴァルが政権に復帰した[25]。前年末には，ドリオはラヴァルの政権復帰を好意的に考えていた。おそらく，それがかれ自身の政権獲得以前の最後の段階になるのではないかと考えていたようである。しかし，1942年2月半ば，ラヴァルは，バルテレミーとフォサーティに，自分が首相になった場合でも，「すくなくとも最初は」，かれの内閣にドリオもデアも入閣させることはできないだろうと打ち明けていた。ヴィクトル・バルテレミーたちは，そのとき，「ドリオには入閣の意志はまったくありません・・・ドリオとフランス人民党にとっては，あなたが政権に復帰するのをみるだけで十分なのです」とラヴァルに断言した[26]。

実際には，ドリオはけっして閣僚のポストを軽視していたわけではなかった。1942年1月には，フランス人民党の党員たちのあいだで，ペタン元帥がドリオを入閣させるためにかれの意向を打診したという噂が流れた[27]。3月末には，デアの言を信じるならば，ドリオは自分が内相になるという噂を流させ，巷間，大規模な

ランスの他の地方から切り離され，ナンシーを旧首府とするロレーヌ地方はドイツ併合地区になった。また，占領地区全体で，3色旗の掲揚や“ラ・マルセイエーズ”の演奏は禁止されていた。したがって，マルセル・マルシャルが語ったような群衆の感情と行動は，おそらく，フランス人民党の姿勢への賛同以上に，そのときまで押し殺していた愛国心のほとばしりの結果であったろう。J.-P. Brunet, *op. cit.*, p.385.

[23] ジョルジュ・マンデル。伝統的右翼の政治家，第3次ダラディエ内閣（1938年4月10日成立）とその後継のレノー内閣（1940年3月21日成立）に植民地相として入閣。文相のジャン・ゼーとともに，ダラディエ内閣における2人のユダヤ人閣僚のひとり。

[24] J.-P. Brunet, *op. cit.*, p.386.

[25] Robert O. Paxton, *La France de Vichy 1940-1944*, Nouvelle édition revue et mise à jour, Editions du Seuil, Paris, 1973, 1997, pp.174-178, 渡辺和行・剣持久木訳，『ヴィシー時代のフランス　対独協力と国民革命1940-1944』柏書房，2004年，pp.140-143; D. Wolf, *op. cit.*, p.359, 平瀬・吉田訳，p.355.

[26] Ⅴ. Barthélemy, *op. cit.*, pp.290-291.

[27] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapports des 13 et 15 janvier 1942.

内閣改造の場合には，ドリオとデアの 2 人が入閣し，ドリオは内閣改造のリスクの責任をひとりで引き受けないために，デアと連帯するつもりだという噂が立てられたという[28]。フォサーティは，のちに，ドリオがはっきりと内相のポストに立候補を表明して，政権復帰直前のラヴァルとの交渉を任されたことを認めている。しかし，ドリオがかれの協力者たちのために労相を含む 2 つか 3 つの追加的な閣僚ポストを要求したため，話合いは成功しなかったという。また，ラヴァルのほうは，以前にかれを失墜させた「12 月 13 日の宮廷革命」があらたに起こることを恐れて，内相のポストを自分の手に握ろうとしていた。フォサーティの証言によれば，内閣成立の 2，3 日まえに，ラヴァルとドリオは会談したが，ラヴァルはドリオに，戦術的理由で，閣僚のポストを託すことができないと打ち明け，ドリオは，ほとんど無言で立ち去ったという[29]。

フランス人民党の下部党員たちのあいだでは，ドリオが入閣しなかったことについてはもっと好意的に解釈され，最初，ラヴァルはドリオに植民地省の政務次官のポストを提供しようとしたが，ドリオはそれを拒否し，ついでドリオに内相のポストが提供されたが，もし内相のポストに労相，情報相，青年相の職務が加えられたならば，かれはそれを受諾したであろうと噂された。確かなことは，ドリオが，最初は穏やかに，その後は，しだいにはっきりと，ラヴァルがフランスの植民地を守ったり閣僚人事を刷新する能力がないのを批判しはじめたことであった[30]。そして，その一方で，ドリオは，党員たちに政権獲得の見通しをちらつかせはじめ，1942 年 5 月 17 日には，パリ地域の幹部党員たちの集会で，「わが党の時代は，おもっていたより早くやってくるかもしれない。すでに，1940 年 6 月に，われわれは政府にはいろうとすればはいることができた。いままた，その噂がわれわれのまわりで立てられている。しかし，党が十分強くならないかぎり，否！といわなければならない」，「わたしは自分がなにを望んでいるか知っている。わたしが君たちをどこに連れていこうとしているか知っている。君たちを完全な政権に率いていくのだ！」，「フランス人民党は，そのときがきたならば，弱体化した行政機関を取り変え，そして，わたしは，冶金工を郡長に，さらには海軍大将や海軍准将に任命するのをためらわないだろう」と発言して，虚勢を張ることを躊躇しなかった。

ドリオは，党組織のすべてのレヴェルにたいして，政権の観念に慣れ，その執行の心構えをするために，市（町，村）長，警察署長など，あらゆる次元の行政担当者と接触するよう要求し，「もし君たちが政権に到達したならば，これらの人びとを支配下に置くのは君たちである。大胆になり，自分の力に自信をもちたまえ，そして，いますぐ君たちの力を行使したまえ。君たちの地区，君たちの郡のすべての企業と頻繁に接触して，その情報をえたまえ。君たちの警察力を確立したまえ。じゃま者を片づけ，君たちが住んでいるところで革命を起こす準備をしたまえ」と語った[31]。その結果，下部党員から指導部まで，党全体が熱気にとらわれ，権力がすぐ手の届くところにあるかのような妄想にまでふくれあがった自家中毒に捉えられた[32]。1942 年 10 月には，「政権要求大会」と銘打った全国大会の開催が予定されていた。

多くの人びとには，フランス人民党は唯一の有望な対独協力政党であるとおもわれていた。

---

[28] *Journal de Marcel Déat*, 24 et 31 mars 1942.

[29] *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Fossati《Exposé des faits》du Commissaire du gouvernement et procès-verbaux d'interrogatoires.

[30] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapports des 13 juin et 25 juillet 1942.

[31] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport des 18 et 22 mai 1942.

[32] J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 387 - 388.

1942年5月に，ヴィクトル・バルテレミーは，過去を振り返って，前年夏以来，フランス本土の占領地区でも非占領地区でも，さらに植民地でも，党とその指導部の不休の宣伝活動――一連の集会の開催，機関紙発行部数の増加――のおかげで，あらたな入党者がいちじるしい数にのぼったといい，「数万人にのぼる入党者が殺到した」と書いている[33]。入党者数についてのこのようなバルテレミーの文章は，あきらかに誇張されていたといわなければならないが，しかし，ドイツの政府機関自身も同様な誇張に陥り，親衛隊保安部（SD[34]）の1942年7月7日付の分析も，フランス人民党の党員数を占領地区6万8,000人，非占領地区8万人と見積もっている。同保安部はちっぽけな集団であるコスタンティーニのフランス同盟の党員数を3万人と数えていて，ドイツの政府機関もまた，その願望を現実ととりちがえたり，対独協力主義者たちの荒唐無稽な主張を現実として受け取ったりしたのである[35]。

バルテレミーのあげる数字を修正することが不可能であるとしても，フランス人民党への大量の入党者数を，1941年6月以来，フランス人民党が開催してきたあらゆる種類の多数の宣伝集会の成功の結果と認めることはできよう。この時期，ドロンクルの革命的社会運動（MSR）を見舞った危機の結果，占領地区全域で革命的社会運動（MSR）からフランス人民党へ多数の入党者が押し寄せた。ヴィクトル・バルテレミーによれば，一地区の革命的社会運動（MSR）の党員全員がフランス人民党に移ったこともあったという。また，この時期，国家人民連合からの転向者ピエール・セロールや，ジャン・ル・カン，すこしのちにピエール・ドリュ・ラ・ロシェルなどの著名な元フランス人民党の幹部が同党の旗の下に戻り，アンリ・バルベも，国家人民連合にとどまりながらも，ドリオとの友情関係を復活させた[36]。

もちろん，フランス人民党の指導者たちは，フランスの世論の大部分が同党の対独協力主義に反対していることを自覚していた。ヴィクトル・バルテレミーは，1942年3月末，プラハで開かれた反ボルシェヴィズム展覧会の開会式に招かれ，フォサーティを伴って同市を訪れ，ボヘミア＝モラヴィア副護衛官のラインハルト・ハイドリッヒがホスト役をつとめる晩餐会に出席したとき，ハイドリッヒにたいして，「われわれは，あなた方ドイツ人が，対独協力主義のフランス政府は国民のあいだに人気があるにちがいないとおもうことによって，重大な誤りを犯さないだろうかと心配しています」とはっきりいっている[37]。おそらく対独協力は，ドリオやフランス人民党の指導者たちの考えでは，フランスにとっては「義務」であり，つらくても進んでしなければならないことだったのであろう。

ドリオとその仲間たちがいちばん心配していたのは，フランス人民党の幹部をねらったテロ行為であった。1941年12月末には，元共産党中央委員で同党からの離反者フェルナン・スーペが襲撃されて重傷を負い，その後も，1942年4月29日には，元共産党上院議員であったジャン・マリー・クラマミューの身代わりに，その息子が襲われ，6月2日には，『人民の叫び』紙の主筆アルベール・クレマンが殺され，さらに8月6日には，セーヌ・エ・オワーズ県連書記のギャシュランが暗殺された。8月8日におこなわれたギャシュランの葬儀のとき，ドリオは，追悼の辞のなかで，「暗殺者が執拗に攻撃しようとしているのは，われわれにたいしてである。わたしはいう。このような犯罪は，

[33] V. Barthélemy, *op. cit.*, p.302.
[34] ドイツ国内外で諜報活動をおこなった親衛隊の組織。
[35] *Archives Nationales*, F^{7} 15145, note intitulée Der Befehlshaber des Sicherheitpolizei und des SD im Bereich des Militärbefehlshabers in Frankreich, 7 juillet 1942.
[36] V. Barthélemy, *op. cit.*, pp.309-313, 317; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, plusieurs rapports.
[37] V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 291, 294.

罰を受けないではすまない。もう沢山だ。君の血は血を呼んでいる！」と叫んだ。しかし，党内で焦燥がしだいに大きくなり，報復の感情がつよくなってきたにもかかわらず，そして，犯行の責任者がどこにいるか完全に分かっていたにもかかわらず，結局，ドリオはフランス人民党の党員たちを報復の道に投じようとはしなかった。報復は事態をいっそう悪化させるだけだと考えたからであったろう[38]。

「政権要求大会」と名づけた全国大会の開催予定の，1942 年 10 月が近づいていた。しかし，ドリオは，9 月初め以来，フランス人民党が国家の指揮をとれるまでになったという同僚たちの解釈を修正し，また，同党の指導者たちも，党が顕著に前進したことを認めながらも，なお政権を奪い取れるまでにはほど遠いことを党員たちに説明し，ドリオが力づくで政権を手に入れようとおもってはいず，「政権要求大会」というのは，たんにフランス人民党が国を統治する能力があるのを示すためだけであると主張した。しかし，かれらは，全国大会がドイツ占領軍の視線の下で開催され，党の今後の運命が占領軍の判断に左右される以上，どうしても大会を成功させなければならないと主張していた[39]。

このようなフランス人民党の動きとその「政権要求大会」の接近は，他の対独協力主義組織の指導者たちを結集させて，対抗キャンペーンへと駆り立てた。マルセル・ビュキャールが『ル・フランシスト』紙上でドリオを激しく非難したが[40]，とりわけフランス人民党の運動に反対する活動の先頭に立ったのは，マルセル・デアであった。1942 年 7 月 12 日の国家人民連合の全国評議会で，かれは，ドリオがかたくなに拒絶していた単一政党結成の計画をふたたび取り上げ，9 月半ばには，「国民革命戦線（Front révolutionnaire national, FRN）」の結成をつよく勧告した。この「国民革命戦線（FRN）」は，ドイツ大使館の支持を受け，まもなく，国家人民連合，フランシスム，革命的社会運動（MSR），反ボルシェヴィキ行動委員会などの糾合に成功した。フォサーティとバルテレミーは，フランス人民党がこの再編成された新しい組織にはいることに反対ではなかったが，ドリオは，単一政党はさまざまな傾向の団体を寄せ集めたものではなく，それは他の対独協力グループがフランス人民党のなかに溶け込むことによって結成されなければならないと主張して，これを拒否した。10 月 30 日，ドリオは，アヘンバッハとの私的な――デアも同席していた――夕食会のときに，かれのホストがおこなったあらゆる説得の試みにもかかわらず，あらためて，それを拒否し，アヘンバッハの懇願と，そして脅し――かれは，語気を強めて，ドリオの態度が，ドイツ大使館のいっさいの支持の停止とおそらくフランス人民党の解散を意味することになろうとのべた――を頑強に拒絶した。ドリオが立ち去ったあと，デアは，ドリオの「病的な自意識過剰」というアヘンバッハの診断に同意しているが，実際には，ドリオは，もっとも堅固な政治的，イデオロギー的構造をもっていた党，フランス人民党の党首として，他の団体の「下部組織への働きかけ」をつうじて，他組織の加入者たちをかれの党へ引き抜こうと考えていたにちがいない[41]。

このようにして，ドリオが仕掛けた組織的キャンペーンの巨大な動きはヴィシーに大きな不安を撒き散らし，ヴィシーでは，すくなくと

[38] Ｖ. Barthélemy, *ibid*., p. 30; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, 1942 年 8 月から 10 月にかけての多数の警察報告。

[39] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 11 septembre 1942.

[40] Marcel Bucard, *Le Franciste*, no. 230, 11 juillet 1942, cit. par Alain Deniel, *Bucard et le Francisme*, Picollec éd., Paris, 1979, pp. 214-215.

[41] *Journal de Marcel Déat*, 2 septembre, 3, 17, 30 octobre 1942. A Deniel, *ibid*., pp. 216-218; Claude Lévy, *Les Nouveaux Temps et l'idéologie de la collaboration*, Fondation Nationale des Sciences Politiques, Paris, pp. 216-218; J.-P. Brunet, *op. cit*., pp. 390-391.

もドリオがデアとともに入閣するという噂が広がり，おそらく，かれがドイツ政府筋でえている支持のおかげで，政権を掌握することになろうと信じられた。しかし，フランス人民党が「政権要求大会」を目前に控えていた1942年9月に，ドイツ大使アベッツは，外相リッベントロープに，つぎのようなドリオにたいする批判的な電報を打っていた。「単一政党の結成が許されるとすれば，私見によれば，その指導は，ドリオの党のような，唯一の直接行動主義のグループの手に委ねることは避けなければならないでしょう。なぜなら，同党は，やがて，国家社会主義の精神をもった新生フランスを生み出すことの可能な，国民的神話を呼び起こすことをみずからの義務としかねないからです[42]。」そして，10月初めには，フランス政府筋では，リッベントロープが，すべてのドイツの機関にたいして，ドリオの政権掌握にかんするいっさいの噂に終止符を打つよう厳命した指示を送ったということが語られた[43]。しかし，他方で，フランス人民党の大会のときには，ナチス親衛隊（SS）が相当な物質的援助（車を所有しているフランス人民党員への燃料や通行許可証など）を提供したことも事実であった。この頃のデアの日記は，パリにあるドイツ軍政司令部の本部は，ドリオが政権につくのを望んでいるようであると書いている[44]。

最初は10月21－24日に予定されていた「政権要求大会」は，結局，11月4－8日に延期され，1942年11月4日，水曜日に，ヨーロッパ最大の映画館ゴーモン・パラスで，フランス人民党第4回大会が開催された。ゴーモン・パラスの観客席は3,400席であったにもかかわらず，同党機関紙『人民の叫び』は，大会に出席する代議員の数は7,200人であると予告し，さらに，11月5日の同紙は，赤色の大きなタイトルで，「数十万人のフランス国民を代表する7,200人の革命家たちが，統一と力と名誉の壮大な示威行動のなかで，党首ジャック・ドリオの後ろに整列した」との文章を掲げた。あるいは，会場に加えられた改装と整備によって定員より多くの代議員を収容することが可能であったとしても，おそらく，この公式発表の数字には，フランス人民党に習慣的な数字の水増しの結果をみなければならないであろう[45]。

『人民の叫び』紙の発表によれば，代議員の平均年齢は31歳であった（1938年3月の第2回大会では34歳であった）。かれらの政治的前歴は41.8パーセントが所属政党なし，21.6パーセントが元共産党員，25.9パーセントが元右翼ないし極右同盟メンバー，9.4パーセントが元社会党員あるいは中道左派政党の党員，1.1パーセントが議会右翼の出身であった。したがって，ヴィシー政権下のフランス人民党の政治的基盤は，1936年11月の第1回大会以来，ほとんど変わっていなかった。また，代議員の職業構成についていえば，農民8.1パーセント，商人・職人・出張販売人9.4パーセント，公務員・公益事業従業員15.6パーセント，工場主あるいは自由業9.2パーセント，銀行員・保険会社従業員1.9パーセントであり，残りの55.8パーセントについては工業部門別が乱雑に示され，雇い主，雇用者（事務労働者・生産労働者）の身分別も明示されていなかった。また，冶金工，炭鉱夫，建築労働者については，それぞれおよそ20パーセント，7パーセント，

[42] Actes du Secrétariat d'Etat aux Affaires étrangères, France, vol, 10, Télégramme no. 5295 du 15 novembre 1942, cit. par D. Wolf, *op. cit*., p.333, 平瀬・吉田訳, p.330. 第2次世界大戦中のドイツの対仏政策の矛盾については, D. Wolf, *ibid*., pp.326-335, 平瀬・吉田訳, pp.325-331.

[43] *Journal de Marcel Déat*, 7 octobre 1942.

[44] *Journal de Marcel Déat*, 28 octobre et 13 novembre 1942.

[45] ヴィシー政府の総合情報室（RG）の報告によれば，フランス人民党の指導部は，パリ地域の党員全員を集め，大会の代議員数を実際より多くみせるために，かれらを地方やアフリカからきた多数の代議員のそばに並ばせたという。J.-P. Brunet, *op. cit*., p.392; Philippe Burrin, *La dérive fasciste. Doriot, Déat, Bergery, 1933-1945*, Editions du Seuil, Paris, 1986, p.436.

11 パーセントというような数字が示されていた。このような不正確な統計にもかかわらず，また，これらの数字すべてが信憑性を欠いているにもかかわらず，あえてこの統計を信じるならば，戦前とくらべて，フランス人民党では生産労働者の党員数が増加したと判断できるようにおもわれる。

大会は，午前 9 時 30 分，党の死者への呼びかけから始まった。前年 6 月 2 日，フランス義勇軍団（LVF）の兵卒として 21 歳で戦死した，シモン・サビアーニの息子フランソワ・サビアーニの霊を呼び出す儀式は，とりわけ，埋葬されるまえのかれの遺体が包まれていたという 3 色旗が展示されたとき，全員の感動を引き起こした。ついで，党書記長のヴィクトル・バルテレミーが党首をたたえる開会のスピーチをおこない，そのあと，ドリオが演説を始めた。バルテレミーによれば，その演説は昼食のための休憩をはさんで 7 時間続き，超満員の会場は最大の注意を集中してそれに耳を傾け，熱烈な拍手によって演説はしばしば中断された[46]。

しかしながら，この演説のなかで，ドリオは，第 1 次世界大戦以後のかれの政治的遍歴についておそろしく長い自己正当化の釈明を展開し，ついで，未来の「フランス人民国家」についての解説に夢中になった。また，ドリオが「ユダヤ人問題」の解決のために，既述したような 9 つの提案をし，極端な反ユダヤ主義の態度を示したのは，この演説においてであった。さらに，かれはヒトラーを「フランスにたいするドイツの勝利を超越して，ボルシェヴィズムの危険を遠ざけるために，東部における戦争の必要とヨーロッパ再編成の巨大な使命」に気づいた「この天才」，「戦時国際法の存在とフランスの政治的不安定にもかかわらず」，われわれに「60 万人の捕虜を返したこの寛容な人物」と呼び（この 60 万人というような数字をドリオがいったいどこからとったのか不明である），ヒトラーの賞賛に懸命になったのであった[47]。

ドリオは，大会にたいして，ペタンとラヴァルに 2 通の電報を打つことを提案し，了承された。ペタンには，大会は「敬意のこもった忠節」を誓い，「政府が，フランスの植民地の防衛を容易にする，ヨーロッパ間協力の風土をつくりあげるのを全力で助ける意志」を示し，ラヴァルに宛てた電報は，「党は，フランスとドイツとの緊密な協力のために，そして，フランスの植民地をアングロサクソンの攻撃から確実に守るために，あなたがなさっている努力のすべてを国全体で支えるつもりでいます」と告げていた。政権獲得問題については，ドリオは大会参加者に「君たちには，まだ，君たちの力で政権を獲得することはできない」といっただけであったが，大会参加者のうちの慧眼なものたちは，ドイツ占領軍当局の正式な同意がなければ，フランス人民党は政権をとることができないことを理解したことであろう。

11 月 5 日と 6 日にパリのいくつかの会場に分かれておこなわれた委員会別討議が終わり，11 月 7 日にはふたたびゴーモン・パラスに集まった全員出席の会議でおこなった閉会演説のなかで，ドリオは，「政治屋たちの古めかしい組み合わせなどは，わたしの眼中にはない！わたしは急進党や社会党（SFIO）や共和派連盟をつくろうなどとは望んでいない！全体主義の政党をつくりたい！ファシスト政党をつくりたいのである！」と叫んだ。熱狂した会場は際限なく続く拍手喝采をドリオに送り，フランス人民党の党歌と“ラ・マルセイエーズ”の合唱でかれをたたえた[48]。

11 月 8 日，日曜日の午後には，冬季競輪場で大集会をおこなうという，打ち上げ用の最後の行事が予定され，多くの党員たちは，心のな

[46] Ⅴ. Barthélemy, *op. cit*., p. 318.

[47] J.-P. Brunet, *op. cit*., pp. 392-393.

[48] Ⅴ. Barthélemy, *op. cit*., p. 319; J.-P. Brunet, *ibid*., pp. 393-394.

かで，奇跡を，すなわち政権掌握に到りつく始動装置の作動を期待していたのではないかとおもわれるが，しかし，その日の朝，英米軍が北アフリカに上陸作戦を開始したという知らせが届いた。パリにおけるヴィシー政府の代表ド・ブリノンは，北アフリカでの事件の重大な成り行きを口実にして，フランス人民党指導部に集会の中止を要請した。ドリオは拒否した。しかし，ヴィシー政府のコミュニケが午後１時のラジオのニュースで集会の中止を正式に発表したので，ドリオも折れて，予定されていた集会の開催は取り消された[49]。

しかし，フランス人民党が，すでに，そのあらゆる情報経路をつうじて，集会の実施命令を流していたので，当日午後には，数千人の党員とシンパがグルネル大通り（パリ 15 区）の冬季競輪場の周辺や隣接する道路に集まってきた。そこで，ドリオと政治局メンバーは，車に乗って，大デモ隊の先頭に立ち，デモ隊は，マルソー通り（パリ８区）を通ってエトワール広場に出，右折して，機動憲兵隊の非常線を押しのけながら，シャンゼリゼ大通りに流れ込んだ，デモ隊員は「ラヴァルを死刑にしろ！裏切者ラヴァルを死刑に！」，「ラヴァルを辞めさせろ！イギリスと戦え！」と叫んだ（ただし，翌日の『人民の叫び』紙は，検閲を考慮して，「ドリオ万歳！ペタン万歳！ドリオを政権に！イギリスと戦え！対独協力を！」という叫びを掲げるだけにとどめた）。党の警備係の指揮の下で，デモ隊員は縦列に整列し，フランス人民党の党歌と“ラ・マルセイエーズ”を声を張り上げて歌いながら，シャンゼリゼ大通りを下り，コンコルド広場で２つの部隊に分かれ，１隊はサントノレ街，他の１隊はリヴォリ街を通って，フランス人民党本部のあるピラミッド街（パリ１区）に到着した。

党本部のバルコニーから，政治局のメンバーに囲まれたドリオは，急いで取りつけた拡声器を使って，群衆に向かって話しかけ，「フランスはわれわれの祖国であるが，しかし，ヨーロッパはわれわれ両国（ママ）の祖国である。そして，アフリカはわれわれすべてにとってわれわれの土地である。アフリカはアメリカ人のものではない。アフリカはイギリス人のものでもない。アフリカはヨーロッパのものである」と叫んだ。かれが「両国」といったとき，フランスとドイツを指していたのであろうが，そうだとすれば，ドリオは，英米軍の北アフリカ侵攻を前に動揺して感情をおさえきれず，錯乱のあまり，アフリカをドイツと分割するつもりだったのだろうか。そして，かれは英米にたいする宣戦布告を要求し，北アフリカの領土を守るための植民地防衛軍団の設立を呼びかけたのである[50]。

翌朝，ヴァーグラム会館に集まった 2,000 人の党員たちを前にドリオはかれの考えを敷衍し，ヴィシー政府につぎのことを要求するメッセージを送った。1）ただちにイギリスとアメリカ合衆国に宣戦布告すること，2）すべての関係ヨーロッパ諸列強にたいして，アフリカを守り奪回するために，植民地防衛条約の締結を提案すること，3）反コミンテルン協定に加盟すること，4）義勇軍部隊がつくられるのを禁止しないこと。集会後，ドリオは，オープンカーのなかに立ち，あとに続く大勢の党員たちの歓呼の声に送られながら，ヴァーグラム大通り（パリ 17 区）をのぼっていった。一団は，凱旋門下の無名戦士の墓の前を行進したあと，シャンゼリゼ大通りを下ろうとしたが，パリ市警察隊によって阻止された[51]。

---

[49] Ⅴ. Barthélemy, *ibid*., p. 324; Jacques Benoist-Méchin, *De la défaite au désastre*, Ⅱ *L'espoir trahi*, *avril-novembre 1942*, Albin Michel, Paris, 1985, p. 220.

[50] *Le Cri du Peuple*, 9 novembre 1942.

[51] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, plusieurs documents; *Le Cri du Peuple*, 10 novembre 1942.

北アフリカに連合国軍が上陸した結果，地中海沿岸の安全を保証しなければならないという口実の下に，11 月 11 日，ドイツ国防軍は自由地区に侵入してフランス全土を占領したが，ドリオはこれを当然のことと受け取った。11 月 15 日，ダルラン提督が，ペタン元帥の「内密の同意」を理由に，アメリカ軍の支援をえてアルジェの支配権を握ったとき，すべての対独協力主義者同様，ドリオはダルランに罵言を浴びせて，かれをののしり，その背信を非難した。11 月 16 日と 17 日には，ドリオは，ジャック・ブノワ・メシャンとジョゼフ・ダルナンとに何度も会い，2 人とヴィシー政権にたいするクーデタの可能性を検討している。

ブノワ・メシャンは，1942 年 4 月に組閣されたラヴァル内閣の首相付き仏独関係担当政務官となっていたが，フランス人民党にたいしてかれが抱いてい共感と，仏独関係の分野におけるかれの態度がドリオのそれにきわめて近かったことを理由に，9 月 27 日，ラヴァルによって政府から排除されていた[52]。戦後，かれは，当時を回顧して，「ヴィシーに向かって行進し，騒乱に乗じて政権を奪取すべきではなかったろうか。それとも，待機したままで，政府にその犯罪を完成させるべきであったろうか」と書いている[53]。この「政府の犯罪」とは，「英米のアルジェリアおよびモロッコ攻撃によって，アメリカ合衆国との外交関係が断絶した」ことを確認するだけで「満足していた」，ラヴァルの無気力と軟弱さを批判したものであったろう。

これにたいして，1941 年 12 月に「フランス戦士団保安隊 Service d'ordre légionnaire（SOL）」を創立し，南部地区でたぶん 2 万から 2 万 5,000 人の隊員数を数えた戦士団保安隊（SOL）の指導をヴィシー政府から任されていたダルナンは，ペタン元帥にきわめて忠実であり，アフリカの戦士団を組織する任務をかれに課したばかりのラヴァルにもなにほどか心を通じていたので，政府への叛乱の話には慎重な態度を示し，「この国が占領されていなければ，躊躇しないであろうが，しかし，外国の銃剣隊の真ん中でクーデタを起こすことなどできるだろうか」とドリオにのべた。ドリオもまた，なんであれ，ドイツ占領軍の合意なしに行動するなどは思いもよらないと主張した[54]。

この頃，ドリオはナチス親衛隊（SS）と頻繁に接触している。11 月 18 日には，ヘルムート・クノッヘン大佐に政治状況をくわしく説明し，この 6 か月来フランス人民党が繰り返しおこなってきた警告にもかかわらず，ラヴァル内閣は，北アフリカで起こるかもしれない反乱を未然に防ぐためのなんらの措置もとろうとはせず，反対に，「植民地での唯一の対独協力組織であるわが党に，なんら手を差し伸べようとはしていない。ダルラン提督がアメリカ軍の陣営に移ったのは，フランス政府の共謀によるか，怠慢あるいは暗黙の了解が原因でしか起こりえないことである」と語った。また，英米軍のアフリカ上陸作戦以後，フランス政府とペタン元帥の態度が「きわめてあいまい」になり，ラヴァルは，11 月 8 日の閣議で，ヒトラーからの電報――フランス政府が英米に宣戦布告し，ドイツ帝国に味方してかれらと戦う決心をするならば，「われわれは，フランスとともに，すべての障害を乗り越える用意がある」ことをあきらかにしたヒトラーのメッセージ――をみせることさえしなかったといった。さらに，ドリオは，クノッヘンにヴィシー政府を酷評しつづけ，ヴィシー政府の態度は，英米軍がドイツ軍によってまだ占領されていないトゥーロンの野営基地を，ヨーロッパ大陸における橋頭堡とし

[52] 戦後，ジャック・ブノワ・メシャンがジャン・ポール・ブリュネにそのように語っている。J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.396-397．ブノワ・メシャンは戦前からの仏独和解の熱心な信奉者で，この精神からフランス人民党に入党した。

[53] J. Benoist-Méchin, *op. cit.*, Ⅱ, pp.245-248.

[54] J.-P. Brunet, *op. cit.*, p.397.

て，利用できるまでの時間を稼ぐことにあるとおもわれるとのべ，国内的には，ラヴァルは，「英米軍の北アフリカ攻撃が反攻なしにおこなわれるよう準備した民主的，フリーメーソン的分子たちを保護し，かれらを高い地位につける」ことだけに躍起になっていると非難した。

ドリオの話を黙って聞いていたクノッヘンは，この5日後，ドリオとの会談内容を，すこしの論評も加えることなく，そのまま，ヒトラーと親衛隊（SS）長官ハインリッヒ・ヒムラーに伝えた[55]。ベルリンでは，ドリオは親衛隊保安部（SD）長ヴァルター・シェーレンベルクの支持を受けた。シェーレンベルクは，ドリオを，ただひとりの絶対に確実な対独協力主義者とみなしていた[56]。しかし，ヒトラーはすでに決定を下していた。9月21日，外相リッベントロープはアベッツに電報を打ち，ヒトラーの決定にしたがって，ドリオがラヴァルにとって代わるかもしれないという，フランスで流れている噂に終止符を打つよう命令した。12月4日には，ふたたびリッベントロープは，仏独協力のためにとった個人的な率先行動が理由で，かれの不興をこうむった[57]アベッツの後釜にすわっていたシュライアーに，つぎのように打電した。「総統は，いま一度，ドリオを将来の首相とみなすことはまったく問題にはならないと明言された。ラヴァルこそ，われわれにとっては，首相として願わしい人物である[58]。」

この2週間後，ラヴァルはヒトラーおよびリッベントロープと政治会談をおこなったが，それはドリオにとってかれの努力が終わったことを意味していた。これらの会談において，ラヴァルは，存在するすべての政治集団を単一政党に融合させ，その準軍隊的団体を国家の「民兵団」に組織し，かれ自身がこの組織の指導者になることを提案した。ドイツ政府が以後，フランスの国内問題にかんしてラヴァルにそれまでより大きな行動の自由をあたえたことは疑いない。したがって，ドリオは，いまや，謀反人の立場に置かれたのである[59]。リッベントロープは，ドイツ政府はフランス人民党の解散には同意しないと明言した[60]が，しかし，以後，同党の活動はドイツ占領軍の厳しい検閲下に置かれ，同党が11月23日にヴァーグラム会館で組織した集会についても，12月6日に同じ会館で開催した全国評議会での討議についても，パリの新聞がそのほんのわずかな情報でも公表することは禁止された。このうちの11月23日の集会は，もともとは11月20日に計画され，北アフリカへの英米の「侵略」に抗議するためのものであり，フランス人民党はこのために大変な宣伝努力を繰り広げたのであったが，それに

---

55) *Archives Nationales*, F^{7} 15145, dossier 3, note de Knochen au Reichsführer et au Reichsicherheitshauptant, 23 novembre 1942; Eberhard Jackel, *La France dans l'Europe de Hitler*, Arthème Fayard, Paris, 1968, p.346 et passim.

56) ニュルンベルク文書館，現代ユダヤ関係資料センター，1942年11月17日の覚書き。

57) 1942年11月19日に，リッベントロープからアベッツに，つぎのような秘密の個人的電報が打たれている。「フランスにおける政治の動きと独仏関係の問題へのいっさいの働きかけをやめ，いかなる個人的イニシャティヴもとらないように願う。」*Archives Nationales*, W350, bordreau 1310, pièce 19.

58) これらの電報は，ディーター・ヴォルフとジャン・ポール・ブリュネによって引用されている。D. Wolf, *op. cit.*, pp.367, 371, 平瀬・吉田訳, pp.360, 364; J.-P. Brunet, *op. cit.*, p.398. アベッツの蒙った不興の理由については，Otto Abetz, *Histoire d'une politique franco-allemande, 1930-1950, Mémoires d'un ambassadeur*, Stock, Paris, 1953, pp.283-284.

59) ヴィシー政府によって政治的決定がおこなわれるたびに，ドリオは政府より過激な解決策を提案した。ディーター・ヴォルフによれば，「政府の政策を競り上げていくというこの方法は，ヴィシー政府の観点からすれば，“裏切り”に近かった。なぜなら，ヴィシー政府は，自陣営の極端派とドイツ占領軍当局の両者にたいして，二正面作戦を強いられたからである。フランス人民党の政策は，フランス政府をドイツ占領軍の要求にたいしていっそう従順にさせることに貢献したのは疑いない・・・他方，ドリオとラヴァルの衝突は，すべてに腹を決め，背水の陣をしいた狂信者と，交渉者としての自分の才能に望みをかけ・・・まだ政治的交渉の余地があると信じている男とのたたかいであった。」D. Wolf, *ibid.*, p.361, 平瀬・吉田訳, pp.356-357.

60) D. Wolf, *ibid.*, pp.371-372, 平瀬・吉田訳, p.364.

もかかわらず，集会は最後の瞬間にドイツ占領軍当局によって禁止されたのである。同時に，ドリオが暗殺されたという噂が執拗に流され，下部党員たちの動揺を引き起こした。

結局，集会は，クノッヘンの報告によれば，6,000 人か 7,000 人の聴衆を集めて，11 月 23 日におこなわれた。クノッヘンは，この報告のなかで，このとき，ドリオは，はじめてフランス政府を容赦なく攻撃したと書き，「ドリオはフランス政府がドイツ政府にたいして誠実でないと非難し，ヒトラー総統が，フランスに軍事的援助を提供しようとして，フランス政府に電報を送ったこと，それにもかかわらず，その電報をフランス政府が閣僚たちに伝達しないで 1 週間も放置したことを強調した」とのべ，ドリオは，かれの党の力強い支持を受けていて，植民地防衛軍団が近く創設されるだろうが，しかし，その指導者たちの忠誠があきらかにならないかぎり，いかなる行動にも参加しないよう党員たちに要求した，と記している[61]。

また，12 月 6 日のフランス人民党全国評議会――ドイツ警察の 2 つの報告は，その出席者数を 2,000 人と 3,500 人と推算している[62]――のときにおこなった演説においても，ドリオはあらためてヴィシー政府の日和見主義と裏切りを激しく非難し，聴衆は「ラヴァルを銃殺刑に！」「ドリオを政権の座に！」という叫びを何度もあげた。ドリオはトゥーロン港におけるフランス艦隊の自沈を糾弾し，これによって，フランスはおそらく「明日のヨーロッパでフランスがいつの日か重要な位置を占めるチャンスを失った」と判断し，ヒトラーがフランスの態度を卑怯とみなすのも当然であろうといい，しかし，ヒトラーがフランス政府とフランス国民宛てに書簡とメッセージを送ってきている以上，フランス国民は，政府が示す反応を，無視して，ヒトラーに答えるべきであるとのべた。こうして，ドリオは，すべての対独協力組織がヒトラーに「国民の名において返答することに」すみやかに合意し，全員一致を実現することが可能な対独協力のいくつかの規範的テーマを提出するよう勧告したのであった[63]。

この 1942 年頃には，仏独関係はどのような状態にあったのだろうか。また，それはフランス人民党の姿勢にいかなる影響をあたえていたのであろうか。

実のところ，おそらくドリオにとってもフランスにとっても不幸なことに，当時，ヒトラーもその他のドイツ政府の指導者たちも，フランスとの協力を真剣に考えてはいなかったことが今日では知られている。1942 年 3 月 7 日に，ヨーゼフ・ゲッベルス宣伝相は，かれの日記のなかで，つぎのように書いている。「結局，フランスは，息のあるかぎり，われわれの敵でありつづけるだろう。したがって，われわれは，将来のヨーロッパ連合から軍事的，政治的強国としてのフランスを決定的に排除しなければならない。」また，4 月 26 日には，「フランスについては，ヒトラーは，昔も今も，友好的協定に達するのは不可能だという意見である。協力にかんする駄弁は，すべて一時的な目的しかもっていない。それに，ヒトラーは事実だけしかみようとはおもわず，おしゃべりを聞きたいとはおもっていない。かれの意見では，戦争の結末がどうであれ，フランスはその高い費用を支払うことになるだろう。というのは，戦争を挑発し開始したのは，フランスなのだから。フランスは 1500 年のその国境にまで後退させられるであろう」と書いている。さらに，つづけ

61) *Archives Nationales*, F^{7} 15145, dossier 3, rapport du 24 novembre 1942 et pièce annexe; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, pièces des 20, 22 et 27 novembre 1942; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340, tract《La Patrie est en danger! L'Amérique attaque la France!》

62) *Archives Nationales*, F^{7} 15145, pièces des 6 et 9 décembre 1942.

63) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 6 décembre 1942.

て，4月30日には，つぎのように書いている。「もしフランス国民がヒトラー総統のかれらへの要求を知ったならば，かれらは涙が涸れるまで泣くことだろう。いまのところはこれを隠して，かれらの日和見主義からしぼれるだけしぼったようがよいのは，そのためである[64]。」

ドリオや対独協力主義者たちは，ドイツ人によって完全にだまされていたのである。ドイツ政府は，対独協力主義者たちのあいだで対立と分裂を続けさせ，1940年8月17日と1942年11月19日に，リッベントロープがアベッツに宛てた電報のなかで忠告していたように，ドイツ政府は，「フランス国内の不和と国の弱体化」のために力をつくし，「フランスの政治的意志の形成を妨げることが望ましい[65]」と考えていたのであり，ドリオや対独協力主義者たちは，これらのことをいっさい知らなかったのである。あるいは，かれらは，現実を正面から直視するのを拒否していたのである。その例をあげるならば，フランス人民党政治局は，1942年12月1日に『人民の叫び』紙上に発表した声明のなかで，「フランスにたいしてヒトラー総統がとられる確固不動の態度は，フランス人民党がその結党以来要求してきた仏独協力政策を完全に正当化するものであり・・・それは，フランスがいま経験している悲劇的困難にもかかわらず，フランスに，立ち直りの最後の希望とふたたび大国になる可能性をあたえるものである」ことを「確認」している[66]。この時期のドリオの態度にかんして目立つのは，まともな政治的状況分析がまったくないことであり，こうして，かれは，その演説のなかで，ヒトラーがフランスに「同盟関係を申し出ている」とくどくどと繰り返したのであった。フランスはドイツに敗れたのであり，ヒトラーには，事実上，もはや軍隊を所有しないフランスとの同盟関係をどうして思い浮かべることができたであろうか[67]。

連合国軍が北アフリカを占領し，ドイツ軍のロシアへの侵攻がスターリングラード手前で停止したことによって，第2次世界大戦の力関係は逆転しはじめた。しかし，他の対独協力主義者たちも，ドリオも，すでに後には引けない段階を越えていた。

ひとりの政治家だけが，連合国軍の陣営に合流する勇気をもっていた。それはピエール・ピュシューであり，かれは1941年7月にヴィシー政府の内相になっていたが，ドイツびいきではなく，ドリオやデアのように政治的，感情的な対独協力を勧めることはなかった。そして，英米連合軍が北アフリカに上陸するや，かれは，北アフリカに高飛びし，連合国軍の戦闘部隊に身を投じようとした。しかし，1943年5月6日，カサブランカで下船したとき，フランス警察によって逮捕され，1944年3月4日に開かれた特別軍事法廷で，内相のとき，「人質」にかんしてかれが指揮した道徳的に支持できない政策（独ソ戦開始後，1941年8月から始まった共産党員によるドイツ将兵殺傷事件は，8月22日に，ドイツ将兵1人の殺害につき数人の「人質」を銃殺すると定めた政令の公布という結果をもたらし，拘禁されている「人質」の処刑という報復を招いた。銃殺される「人質」は，主に共産主義者やユダヤ人のなかから選ばれた[68]）のため，死刑を宣告され，裁判官によって判決が執行されないようにという願望が表明されたにもかかわらず，結局，銃殺され，見せしめ的な処刑を免かれることはできなかった。しかし，連合国軍に加わろうとした

64) Joseph Gœbbels, *Tagebücher aus den Jahren 1942-1943*, L. P. Lochner, Atlantis-Zürich, 1948, pp.114, 177, 185, cit. par D. Wolf, *op.cit.,* pp.329-330, note, 平瀬・吉田訳, pp.341-342.

65) C. Lévy, *op.cit.,* pp. 233-234 に引用された1940年8月17日と1942年11月19日のアベッツ宛てリッベントロープの電報。

66) Cit. par Ⅴ. Barthélemy, *op. cit*., p.332.

67) J.-P. Brunet, *op. cit*., pp.400-401.

68) 渡辺和行『ナチ占領下のフランス　沈黙・抵抗・協力』講談社，1994年, pp.142, 190-192.

ピュシューのような行動をとるという考えは，実体のない確信にとらわれていた対独協力主義者たちには，おもい浮かぶことがなかったであろう。

ヴィクトル・バルテレミーは，1942 年のクリスマスの翌日，グルネル街の党幹部用のアパートでドリオと差し向いで交わした会話を正確に想い起こしている。連合国軍の北アフリカ上陸やフランス植民地が受けた被害など，それまでの 2 か月間の事件の成り行きに深く動揺していたバルテレミーは，ドリオとともに全体的な状況分析をしたいとおもっていた。バルテレミーは，ドリオにつぎのようにいった。「われわれは，11 月 8 日には，戦争で重要な役割を演じるというまだわれわれに残されていた最後のチャンスを失ったのではありませんか・・・これがわたしを悩ませている問題なのです・・・今日，われわれがたとえイギリスやアメリカ合衆国と戦争状態にはいったとしても，ヴィシー政府は，英米の味方ではないとしても，消極的な態度しかとらないことでしょう・・・それに，ヒトラーとその助言者たちも，状況を現実的で革命的に把握すべきであったにもかかわらず，ヒトラーは，対独協力主義者たちが当然かれに期待していたこの“現実的で革命的な政策”をおこなおうとはしませんでした。かれは東方でも同じ過ちを犯しました・・・なぜ，ヒトラーはこのように行動したのでしょうか。かれも，かれの副官たちも，それに，かれの同盟者のムッソリーニも，われわれが尊敬し，信じたような革命家ではなかったと結論しなければなりません・・・フランスは率先してヨーロッパ連合のなかにほとんど力づくでも入り込もうとしなければならなかったのに，それをしなかったのです・・・われわれは戦争での優位を失いつつあります・・・最悪の事態がつぎつぎと起こっています。もし，せめて，このような状況を前にして，とりわけ北アフリカで起こったばかりの出来事を前にして，明確な決断がおこなわれていたならば，もしヒトラーがそのような決断を要求していたならば，事態は好転していたでしょうが，しかし，ヒトラーはそうはしなかったのです。かれは数週間のあいだに 2 度にわたってラヴァルと面会していますが，それによって，いったいなにが変わったというのでしょうか。」

ドリオは注意を集中し，バルテレミーの独白に耳を傾けていた。そして，つぎのように答えた。「君はペシミストすぎるとおもう。まちがいなく，あまりにも悲観主義的だ。ド・ゴールの言葉を茶化していえば，君を驚かせることになろうが，“われわれはひとつの戦闘に敗れたが，しかし，戦争には敗れていない”。戦争というものは，それが終わったあとでしか，最後の 4 分の 1 が終わったあとでしか，いや，しばしば，終わって長く経ってからしか判断を下せない。最後の 4 分の 1 になるまでには，まだほど遠い。われわれは甘やかされていた。とくにドイツ人は，開戦以来ほとんど絶え間なく続いた勝利によって，甘やかされていた。われわれが道の途中ですこしばかりの困難に出会うのは，避けがたいことだ・・・しかし，ヨーロッパの軍隊は，まだロシアの大部分とバルカン半島全体を占領している・・・アメリカ工業の可能性はたしかにひじょうに大きいが，しかし，ヨーロッパの工業的潜在能力もまだフルに使用されているとはとてもいえない。その人的予備軍はまだ相当大きい。ドイツでは，工業施設を改善し，それを新兵器の生産に適合させるために，巨大な技術的努力が払われつつあるのを僕は知っている・・・たしかに，ドイツ人が，かれらの計画はかならず成功すると信じるという，大きな誤りを犯したことも僕は知っている。ロシアの戦争は，かれらにつらい教訓を課している・・・しかし，僕はドイツの勝利を信じている。僕が国家社会主義の革命を信じているからである。僕は，かれらの国の国家社会主義を信じている。それに，戦争を続けること

以外にいったいなにができるというのだろうか[69]。」

このドリオの意見は，かれが対米，対ソ戦の厳しさに気づきながらも，かれの心のなかでは，かれが共産主義者だった時代と同じように，イデオロギーが最高の優位を占め，その結果，現実が歪曲されていたことを示している。その意見は，たしかに，自己の行動の妥当性についてのかすかな疑惑がドリオの心のなかにあったことをあきらかにしている。しかし，ドリオは，もはや後戻りできないところにまできていたのである。

ドリオや対独協力主義者たちは，ドイツにとってはいかなる存在であったのだろうか。また，なぜヒトラーは，フランス人民党を禁止するのを拒否しながらも，ドリオが政権につくのを承諾しなかったのか。1941 年以後，このようなヒトラーの態度がきわめて明白になったが，ハンガリーとルーマニアにたいするかれの政策が，その理由を暗示しているようにおもわれる。ヒトラーが支配した国では，かれはイデオロギーよりも秩序の確立を好み，かれと同類のファシストよりも，保守主義者の，そしてナショナリストの指導者たちを好んだのである。もし，1942 年 11 月に，ヒトラーがドリオに政権を取らせていたならば，フランスは，ドイツとの同盟，講和条約，相互的譲歩など，どうあっても同国が望んでいたことを実現しようとヒトラーに圧力をかけつづけたであろう。ドリオなら，そうしたであろう。この意味で，ヒトラーはドリオのような人物を恐れていたといってもいい過ぎではない。他方で，ドイツ軍占領下のフランスは内戦と大混乱に陥る危険をかかえていた。もしそのような混乱に陥れば，フランスはドイツの戦争継続に不可欠な巨大な経済資源の譲渡を続けられなくなるであろう。この点では，反対に，ドリオらの存在は，フランス政府にたいする対独協力のための大きな圧力をあらわしてもいたのである[70]。

ヴィシー政府は，ドイツ政府から絶え間なく圧力を受けていた。生まれながらの交渉人と「先祖伝来の悪質な周旋屋」（ジャン・レーモン・トゥルヌーの表現[71]）の素質があったラヴァルは，ドイツ人を丸め込むことができると信じていた。しかし，もちろん，それは誤りであった。ドイツ政府からの増大する要求にたいして，ドリオと対独協力主義者たちは，たえずその要求をせり上げ，ヴィシー政府の無気力と不誠意を告発し，こうして，ヴィシー政府がドイツの要求にたいして態度を軟化させることに一役買ったのであった[72]。

---

69) V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 334-337.

70) 1942 年 7 月，アメリカ軍参謀部の情報部がアメリカ政府に送った報告が強調していたように，休戦以来，ドイツはつねにフランスとフランス政府を有効に利用しようとする要求をし，これにたいしてフランス政府は抗議を続け，ドイツ政府の「悪意」に不満を表明しつづけた。Cit. par Nerin E. Gun, *Les secrets des archives américaines. Pétain, Laval, de Gaulle*, Albin Michel, Paris, 1979, p. 220.

71) Jean-Raymond Tournoux, *Le royaume d'Otto*, Flammarion, Paris, 1982, p. 182.

72) J.-P. Brunet, *op. cit.*, p. 403.

Parti populaire français sous le gouvernement de Vichy 1942-1944. 1

Yukiharu Takeoka

Entre le 4 avril et le 15 mai 1942, Jacques Doriot, chef du parti populaire français, a fait sa grande tournée de discours dans dix-huit villes de la zone occupée. Durant cette campagne, il commença à faire miroiter les perspectives du pouvoir aux militants. De la base au sommet, le parti fut pris de fièvre du pouvoir qui semblait être à portée de la main. Le IV^{e} congrès du PPF, nommé《Congrès de pouvoir》s'ouvrit les 4-8 novembre 1942. Le 7 novembre, dans le discours de clôture, Doriot s'écria《Je veux faire un parti totalitaire ! Je veux faire un parti fasciste !》

Le matin du 8 novembre , on apprit le débarquement des forces anglo-américaines en Afrique du Nord. Le rapport de force commençait à se retourner sur le plan mondial, avec l'occupation de l'Afrique du Nord par les Alliés et l'arrêt des armées allemandes devant Stalingrad. Mais, Doriot avait dépassé le point de non retour.

Le 2 février 1943 où l'armée allemande capitulait à Stalingrad, Doriot demanda à la Wehrmacht de lui permettre de repartir sur le front de l'Est et il repartit le 25 mars. L'influence du chef du PPF sur les légionnaires des volontaires français restait très forte et, avec la LVF, il continuait de disposer d'un instrument qui lui ouvriait la route du pouvoir.

Son séjour sur le front de l'Est dura jusqu'à la fin du février 1944. Au début de janvier 1944, un remaniement ministériel à Vichy fut effectué. Mais c'était très partiel et l'équipe remaiée ne comprenait aucun des proches de Doriot. Le 25 février 1944 il revint à Paris.

A son retour en France, Doriot a été obligé, à la demande du gauleiter Sauckel, d'organiser les Groupes d'Action pour la Justice sociale (GAJS) avec les membres de son parti en vue du recrutement de la main-d'œuvre française pour l'Allemagne. Les GAJS tendaient à faire constituer par le PPF une sorte de police supplétive destinée à donner la chasse aux jeunes français réfractaires au Service du Travail Obligatiore (STO).

Au commencement d'août 1944, la situation militaire s'aggrava de jour en jour. Paris se trouva ainsi à portée des troupes alliées. Le 17 août 1944 les dirigeants du PPF réunis à Paris se préparèrent à partir pour l'Est.

Classification JEL: N44
Mots-clés: Congrès du pouvoir, Groupes d'Action pour la Justice sociale, occupation de l'Afrique du Nord par les Alliés